

【論文】

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』を検証する

— 先行研究の無視は「研究」足り得るか —

鈴木健司

本稿の目的は、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、平22・12）の編集方針への疑義の提示と、記述された項目への修正要求である。

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』は、天沢退二郎・金子務・鈴木貞美を共同編集委員とし、その他一五〇名ほどの項目執筆者を加え、作成されたものである。具体的な疑義内容は、「序」に宣言している「本事典が、基本的に、〈権威〉をめざしていないということ」と「執筆者の意見を尊重し、既成通念や先行研究をどのように踏まえるか——無視・批判・否定等の扱いについても、執筆者のお考えに委ねてある」の二点である。

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』が、「権威」の発生装置として機能していることや、先行研究の「無視」が正当な理由のもとにおこなわれてはいないことを実証する

キーワード：宮澤賢治、宮澤賢治イーハトヴ学事典、天沢退二郎、金子務、鈴木貞美

## はじめに

本稿の目的は、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、平22・12）の編集方針への疑義の提示と、記述された項目への修正要求である。『宮澤賢治イーハトヴ学事典』は、天沢退二郎・金子務・鈴木貞美を共同編集委員とし、その他一五〇名ほどの項目執筆者を加え、作成されたものである。

これまで刊行された類似の辞典・事典を確認しておく。まず、原子朗編著『宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍、平1・10）の刊行、そして、その増補・改訂版として、原子朗著『新宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍、平11・7）の刊行があった。それに続いて、渡部芳紀編著『宮沢賢治大事典』（勉誠社、平19・8）が刊行され、今回、新たに『宮澤賢治イーハトヴ学事典』が加わることとなった。文学者個人を対象とした辞典・事典類が三種（四点）刊行されるということは希有なケースであり、宮澤賢治文学の現代における受容の拡大が実感される。今後ますます宮澤賢治の文学は、読者をふやし、研究されていくことが予想される。

しかし、学問としての節度ある発展という視点から考えた場合、三種（四点）の辞典・事典の刊行が、必ずしも宮澤賢治研究の発展を下支えする役割を果たすという保証はない。安易な研究を再生産させる元凶となりかねないとも考えている。偶然、私はそれらすべての企画に対し、項目執筆（基礎稿の執筆・訂正原案執筆の場合も含む）というかたちで多少の関わりをもつことになった。私は、中心的な役割を果たしていない分、ある程度客観的、公平な目で比較することのできる立場にあるように思っている。

そのような三種（四点）の辞典・事典への私個人の評価であるが、原子朗編著『宮澤賢治語彙辞典』に関しては、画期的な労作と評価してよいと考えている。多少の誤記・誤認等の認められることはやむを得ないことであろう。しかし、その増補・改訂版にあたる原子朗著『新宮澤賢治語彙辞典』となると、事情は少し異なってくる。増補により新項目が立てられた意義は認められるが、改訂箇所は概して説明が饒舌で、簡潔・平明という辞典の基本線から逸脱している。（編著）であったものが（著）となった点も理解しがたい。次

に、渡部芳紀編著『宮澤賢治大事典』だが、事典としての工夫の跡や徹底さというものが見いだされない。もう少し編者が積極的に項目立てやその内容に關与すべきではなかったろうか。項目執筆者の人選も適切でなく、たとえば科学方面の執筆担当者など理化学辞典類の焼き直しに終始している。『宮澤賢治イーハトヴ学事典』だが、〈宮澤賢治学〉〈イーハトヴ学〉の立ち上げをめざした個性的な編集が随所にみられ、その点は高く評価されてよいように思う。ただ一方で、人名などの項目に、まったく宮澤賢治に関わりのない立項があり、かなり理解に苦しむといわざるを得ない。また一部の執筆者に《先行研究の無視》という姿勢があり、この事典への信頼に關わる根本的な問題と考える。

## 一 『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の編集方針に ついて

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の編集方針は「序」に記されている。私が検証したいのは冒頭の三段落分

のみであるが、全体を紹介しておかなければ「序」の理解の客観性を欠くおそれもあるので、ここでは「序」全体を引用する。

### 序

まず、申し上げておきたいのは、本事典が、基本的に、〈権威〉をめざしていないということ。これは執筆者の方々にははじめからお伝えしてある通り、本事典は、ただこれまでの研究の成果、到達点を提示するにとどまらず、むしろ、現在進行中の試行錯誤をも含めて、これからの研究のための方針、計画、手がかりを求め、あるいは現在未着手の新たな問題点、着眼の可能性をも、大胆に示しようようにと――つまり本書は、読者・研究者の未来のために企画されたのである。

このような方針によって、私たち編集委員は、各項目の校正刷りの素読みに際し、明瞭な誤記や事実誤認については訂正しあるいは再考を促すことはあっても、執筆者の意見を尊重し、既成通念や先行研究をどのように踏まえるか――無視・批

判・否定等の扱いについても、執筆者のお考えに委ねてある。

したがって、執筆者の異なる項目間の、矛盾や、意見の相違などには、編集委員が介入して調整するということは必ずしも行っていないので、読者・研究者のみなさんには、各項目の末尾に記された【関連項目】をぜひ御併読下さるようお願いしておく。

さて、本事典の内容は、タイトル及び目次で御覧の通り、【イーハトヴ学】宮澤賢治の作品世界、【人物研究】宮澤賢治の人柄と生涯、の二部に大別されている。これは、いわゆる〈評伝〉的書物において常套的な〈人と作品〉の二項並列的腑分けを便宜的に踏襲しているが、内実においては、〈作品〉を論じるにあたって〈伝記〉を無視し、〈伝記〉を扱うにあたって〈作品〉をそのための資料に還元しているわけではない。とくに《宮澤賢治》において、この二項の相関関係には無視できない特質があるからだ。

よく引用されるように、20世紀文学初頭のオピニオン・リーダーであったポール・ヴァレリーは、《詩人たちの伝記についての知識は、かれらの作品について私たちがなすべき扱い方―作品を賞味したり、そこから芸術上の教訓や問題を引き出す場合の―にとつては、たとえ有害ではないとしても無益である》と主張しながら、すぐ続けて《ヴィヨンとヴェルレーヌの場合にはこの伝記的問題が不可避である》と述べた。この二詩人を例外としたのは、他にもたくさん例外がありうることを意味していて、そこに《宮澤賢治》の名が付け加わるべきことは誰の目にも明らかである。 (ちなみにここで名の挙がったヴェルレーヌが亡くなったのは1896年であり、宮澤賢治はまさにこの年に生れたのである。)

賢治の場合、1933年に亡くなったときにはまだ殆ど無名であったその名が、1940年代から50年代にかけて、まず注目され、急速に敬慕とそして聖人化の対象となったのは、その生き方、誠実で献身的な生涯であった。彼の詩や童話も、まず少年

少女のためのすぐれた読物としてであり、しかし児童文学の世界ではゲテモノ扱いされ、まともな論考としては『賢者の文学』（谷川徹三）、『善意の文学』（中島健蔵）というタイトルが如実に示すように、賢治精神の賢明さや善意が主たる評価の対象であった。

こうした偏向は、敗戦後も概ね変化せず、1950年代、中村稔『宮沢賢治』の登場まで続くのである。

あとは、詳しくは本事典の諸項目に記述されているように、佐藤寛による「四次元」誌の刊行、1956年4月からの本格的な筑摩31年版全集の刊行、さらにその42年版での新改訂を経て、1970年代、宮澤清六の英断による校本全集の登場を機に、賢治研究—とりわけ作品研究は全面的に新しい段階を迎える……

この約40年間に、理科系の研究者の始動、50年という著作権の失効を機に演劇界からの参入による、賢治受容の拡がりを背景にして、〈宮澤賢治学〉、〈イーハトヴ学〉という学問が、ついに成立の契機を得た。本事典がその将来のための礎

石となればさいわいである。ここから新しい賢治像が浮かびあがってくるだろう。

最後に、本事典に参加して下さった執筆者の方々に、心からの感謝の言葉を捧げたい。

2010年10月

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』編集委員

天沢退二郎

金子務

鈴木貞美

この「序」は、編集委員である天沢退二郎・金子務・鈴木貞美、三人の共同執筆というかたちがとられているので、とりあえず編集委員三人のそれぞれに、私の考えを主張していきたいと思う。

二 『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の「権威」を巡って

「序」の冒頭で、「本事典が、基本的に、〈権威〉

をめざしていない”ことを宣言している。しかし、常識的にいって良質な書物ならば、「権威」をめざしていない”ことは当たり前のことである。書き手がめざしているのは「権威」ではなく「評価」である。学問・研究として、「評価」を求めることは当然の行為であり、「権威」をめざすことと同じではない。『宮澤賢治イーハトヴ学事典』編集委員は、なぜいわずもがなな「権威」をめざしていない”ことを宣言したのだろう。また、ほんとうに『宮澤賢治イーハトヴ学事典』は「権威」の発生を回避する努力がなされていたのだろうか。

私は最終的に、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』は〈権威の発生装置〉としての危険性があると結論づけるつもりだが、その前に「権威」とはどのようなものか考えておくことにする。まず、「権威」はどこに発生するのか。それは、作成する側でなく、使用する側に発生する概念といえるだろう。例えば、『新校本宮沢賢治全集』（筑摩書房、1996・3～2009・3）が論文の底本として利用されるのは、多くの場合『新校本宮沢賢治全集』を宮沢賢治のテキストとして最も信頼できる

と「評価」しているからであり、一般にそれを「定評」というのである。ただ、「定評」から「権威」までの距離はごくわずかである。つまり『新校本宮沢賢治全集』をわれわれが「権威」ある全集と認識してしまうことは、ありがちなことだということである。そうならないために、当然のことであるが、その「権威」は常に検証の目にさらされていなければならない。

例を挙げて述べるなら、私は『校本宮沢賢治全集』（筑摩書房、1973・5～1977・10）の「年譜」に対しいくばくかの危惧を抱いていた一人であった。おそらく、『校本宮沢賢治全集』の「年譜」はその段階においてはもともと「定評」のあるものであったといえるだろう。「権威」のあるものとして使用していた研究者もいたかもしれない。しかし、『校本宮沢賢治全集』の「年譜」には方法的に致命的な不備があった。「年譜」作成の根拠となった資料が提示されておらず、利用者は「年譜」を検証するための手立てを持たせてもらえていなかったのである。それに対し、『新校本宮沢賢治全集』の担当者は極力『校本宮沢賢治全集』「年譜」の不備の解消に努め、すなわち、根拠となる資料

を可能な限り提示しつつ「年譜」を作成したのである。私は、いま示した例のように、既存の「定評」や「権威」というものは、常に検証の目にさらされ、いわば、相対化され続けなければならないと考えている。

もつとも、一般的にいって「権威」ということは否定的な意味合いをもつて使われることが多い。或る仮想敵があり、それが「権威」を持つていると認識された場合、「〈権威〉をめざしていかない」ということは、その仮想敵と同類でないという宣言の働きをもつ。私はそれを〈逆説的な意味での「権威」の発生装置〉と呼びたいと思う。『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の編集委員諸氏が「〈権威〉をめざしていかない」ということは立派な心がけといえるだろう。しかし、結果として「権威」化させるような書き方がそこに見いだせるとするならば、編集委員にまったく責任がないとはいえないと考える。

#### 四 『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の「先行研究の無視」を巡って

「序」におけるもう一つの驚きは、「先行研究の無視」の宣言である。端的にいって「先行研究の無視」は、項目執筆者の判断に任されているということである。「序」にいう「執筆者の意見を尊重し、既成通念や先行研究をどのように踏まえるか―無視・批判・否定等の扱いについても、執筆者のお考えに委ねてある」とは、そのような意味だろう。

われわれはなぜ先行研究を引用するのか。「先行研究」を綿密に辿ったからといってそれでよい論文が書けるという保証はない。「先行研究」といっても玉石混交が常であるから、玉を拾い出し、その玉をもって自己の論を顧みてこそ「先行研究」を引用する価値も見いだされるというものだ。だから、「先行研究」を「批判」することも「否定」することも、本来的には、自己の論をそこまで導いてくれたという敬意の表出でなければならない。

では、どのようなとき、学問・研究において「先行研究の無視」という行為は許されるのか。「無視」する場合として、三つのパターンがあるように思う。一つ目は、引用に値しない先行研究の場合。二つ目は、

たまたまその先行研究を読んでいなかった場合。三つ目は、確信犯的な先行研究「無視」の場合である。

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』も学問・研究の一環であることは明らかであるから、先行研究における〈優先権〉の問題を「無視」することは許されまいだろう。

その意味で、私としてもつとも注意を喚起したいのが、三つ目の確信犯的な先行研究「無視」の場合である。

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』には、確信犯的な先行研究「無視」が散見され、それは決して、編集委員が述べる「本書は、読者・研究者の未来のために企画されたのである」といった奇麗事にすり替えられる性質のものではないのである。実態は、単なる勉強不足か、自己顕示欲の発露である。むろんそれは一部の書き手にすぎないことではあるが、編集方針として先行研究の「無視」を許容し、ことに、編集委員の書くものにその傾向が強いという現実を鑑みれば、その欺瞞性は明らかである。

#### 四 天沢退二郎の場合

天沢退二郎が担当した「チエーホフ」は確信犯的な〈優先権〉の「無視」の好例である。以下にその項目の全文を引用する。

##### チエーホフ

Чэков, Антон Павлович

1860—1904

1890年、当時30歳ですでに才気ある短篇小説作家として頭角をあらわしていたアントン・チエーホフは、新境地を開拓するために、事前の調査と研究を重ねた上で、弟の病死にも背を押されるようにして、肺結核の病身をあえてサハリン島へ向かい、今のスタロドブスコエの浜辺に立った。まさにその同じ榮浜に宮澤賢治が、妹トシの魂を追尋する旅のすえに行き着いたのは、33年後のことだ。チエーホフ没後20年後。しかしあの浜辺で、『宮澤賢治』と『アントン・チエーホフ』は、確かに出遭っているのだ！

そのことは、同じ浜に寄せる波の言葉を記述したチエーホフ『サハリン島』、賢治「サガレンと八月」、この二つのテクストを併読すれば誰しも



納得できよう。《いったい誰のために、ここでは浪は咆えているのだらう、誰がそれを夜毎に聴くのだらう》(チェーホフ)；《こんなオホーツクの海のなぎさに座って(……)風のきれぎれの物語を聴いてみるとほんたうに不思議な気持がするのです》(宮澤賢治)◎天沢退二郎【関連項目】北方、サハリン、ロシア文学 【参考文献】天沢退二郎「サハリンへ——宮澤賢治の足跡を追いながら」『新潮』新潮社、2008年6月号

天沢退二郎が書いた項目のポイントは、大正一二年八月の樺太旅行で賢治が立った栄浜の海岸に、三三年前チェーホフもまた立っていたという事実の指摘である。天沢退二郎は賢治の「サガレンと八月」とチェーホフの『サハリン島』との表現の共通性を指摘し、「《宮澤賢治》と《アントン・チェーホフ》は、確かに出遭っているのだ！」と印象的に書いているが、それは表現の綾に過ぎない。要は、チェーホフと賢治は、三三年の時を隔て、共に栄浜の海岸に立ち、吠えるような波音を聞いていたという一致を指摘したということだ

ある。

【参考文献】をみると、「天沢退二郎『サハリンへ——宮澤賢治の足跡を追いながら』『新潮』新潮社、2008年6月号」とのみ記されている。もし、賢治とチェーホフとの関連性について全く知識を持っていない研究者や、愛好者、大学生などがこの項目を読んだと想像してみよう。チェーホフと賢治が同じ栄浜に立っていたことがあるという興味深い出来事の発見者は天沢退二郎だと、誰しもが考えて疑わないのではないだろうか。

しかし、発見者は萩原昌好である。証拠を次に示そう。宮澤賢治記念館の企画展示「宮澤賢治とサハリン 宮澤賢治の原風景・パート1——サハリン編」として、一九九三年八月一日から一九九四年三月三十一日まで展示されていたもので、リーフレットも発行されている。そのリーフレットに萩原昌好が書いた解説を読んでもみるなら、天沢退二郎の指摘したことのすべてが含まれていることを知ることになる。

萩原昌好はリーフレットの「V・栄浜」の章で次のように記している。「栄浜は大泊から真北に上って海岸線にぶつかった地点にあり、ここから太平洋が見え

ます。当時はここまで列車が通じていました。また、ここまでの間、例えば豊原や落合などを含め幾つかの製紙工場がありました。また、栄浜には、演習林もあり、漁港としても当時はかなり栄えていたのです。

賢治はこの北辺の地に立ち、妹トシさんと交信を求めました。そのスケッチが「オホーツク挽歌」となる訳ですが、以前この地を訪れたチエーホフが記したように

丈余の白波が砂に砕けて、さながら絶望にとざされて『神よ何のためにわれわれを創ったのです』とでも言いたげな風情だった。(原卓也訳、チエーホフ全集) というような、一歩町並みを外れると、まことに荒涼とした風景が広がっています。(以下省略)

さらに、萩原昌好は「チエーホフ全集13 中央公論社／昭和六十三年 再訂四版／原卓也訳『サハリン島』より」として、次の文章も紹介している。

ここでは今、新しい家を一軒建てているだけだ。見張り小舎か、宿場なのだろう。見るからに冷たそうな、濁った海が吠えたり、丈余の白波が砂

に砕けて、さながら絶望にとざされて『神よ、何のためにわれわれを創ったのです?』とでも言いたげな風情だった。ここはもはや太平洋なのだ。このナイプーチの海岸では、建築場にひびく労役囚たちの斧の音がきこえるが、はるか彼方に想像される対岸はアメリカなのである。左手には霧にとざされたサハリンの岬が望まれ、右手もまた岬だ……あたりには人影もなく、鳥一羽、蠅一匹見当たらず。こんなところで波はいつたいたれのために吠えたいのか、だれがその声をここで夜毎にきくのか、波は何を求めているのか、さらにまた、わたしの去ったあと、波はだれのために吠えつづけるのだろうか—— それすらわからなくなってくる。この海岸に立つと、思想ではなく、もの思いのとりこになる。そらおそろしい、が同時に、(限(き)りなくここに立ちつき、波の単調な動きを眺め、すさまじい吠え声をきいていたい気もしてくる。

半年を越えて継続された宮沢賢治記念館の企画展示

を、天沢退二郎が気づかないわけではない。たとえ気づいていなかったとしても、萩原昌好は著書『宮沢賢治「修羅」への旅』（朝文社、平6・12）で、次のように同主旨の文を発表しているのである。

賢治はこの北辺の地に立ち、妹トシへ必死に祈ったのである。トシがどのように転生しようとも、その生の無上菩提を希って。そして、残された自分も「みんな」とともに「まことの道」を歩むことを誓ったのである。そのスケッチが「オホーツク挽歌」となるわけだが、以前この地を訪れたチエホフが記したように、

文余の白波が砂に砕けて、さながら絶望にとざされて『神よ何のためにわれわれを創ったのです』とも言いたげな風情だった。（原卓也訳『チエホフ全集』13「サハリン島」より、中央公論社 昭63）

というような、一歩町並みを外れると、まことに

荒涼とした風景が広がっている。

先に私は、「先行研究」が「無視」される場合として、三パターンを挙げておいたが、一つ目の「引用に値しない先行研究の場合」に当たるとするなら、天沢退二郎自身チエホフの項目を、萩原昌好と内容の重なるような書き方をしなかったに違いない。二つ目の「たまたまその先行研究を読んでいなかった場合」は、すでに述べたように可能性は極めて低い。残るのは、三つ目の「確信的な先行研究『無視』の場合」である。文庫版の脚注などにおいて先行研究者の名を省略し、その成果のみを利用・紹介することはあることかもしれない。しかし、この『宮澤賢治イーハトヴ事典』には【参考文献】の欄があるのである。そこに萩原昌好の仕事を書き入れることはできたはずである。しかし、実際そこに記されたのは天沢自身の論文一点であった。このことが、賢治とチエホフの関係の発見の優先権が天沢退二郎にあるかのごとき印象を強めている。天沢退二郎が参考文献として挙げた自身の論文「サハリンへ——宮沢賢治の足跡を追いながら」（『新

潮』新潮社、2008年6月号）を確認してみると、次のように萩原昌好の仕事が紹介されている。

賢治が訪れるより約33年前、ロシアの小説家・劇作家としてすでに活躍を開始していたアントン・チェーホフが、サハリン島を訪れて三ヶ月も滞在し、流刑地の状況を観察・記録したことはよく知られており、この栄浜近辺まで足をのぼしたことがその著作『サハリン島』（一八九五）にも記されている。その中で（これは萩原氏や、ダリヤーエワ女史も注目しているところだが）チェーホフはこの浜のすぐ北隣り、ナイーバ河の河口あたりの荒涼たる浜の情景を次のように叙している――

別の箇所でも萩原昌好の仕事に触れており、敬意をもった扱いをしていることが確認される。

そもそも、サハリンに賢治の足跡をたずねる旅の計画が最初に降って湧いたのは、十年あまり前

のことだ。萩原昌好氏とともに監修にあたったK書店版の宮沢賢治絵童話集の仕事にあたかも付随して、K書店の編集者によってそれはもたらされた。願ってもない機会――であったのに、偶々、私の旅券の期限が切れたところで（こんなことは実に稀です）、しかも旅程はすでに決まっております、もはや旅券申請の時間的余裕はなく、私は諦める他はなかった。

このときの旅を実現した萩原昌好氏は、その成果を一冊の名著『宮沢賢治「銀河鉄道」への旅』（二〇〇〇年、河出書房新社）にまとめられ、その後も、萩原氏、斉藤正義氏、吉見正信氏他の熱心な研究者によってすでに一度ならず二度ならず、サハリン行のツアーが重ねられた。

このように、「サハリンへ―宮沢賢治の足跡を追いながら」（前出『新潮』）においては、萩原昌好に十全なる配慮をしているにもかかわらず、天沢退二郎はなぜ、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の【参考文献】の欄に萩原昌好の仕事を書き入れなかったのか。事典

という性格上仕方ないことだと天沢退二郎は考えたのだろうか。それとも、賢治とチェーホフとの関係は天沢退二郎にとって常識に属すること考えたのだろうか。はたまた、参考文献を読めば萩原昌好の名を掲げているではないかとでも考えたのだろうか。

「チェーホフ」の項目を書く以上、天沢退二郎は萩原昌好の業績を無視してはならなかったのである。

『宮澤賢治イーハトヴ学事典』が「〈権威〉をめざしていない」と宣言しながら、私には、結果として「権威」化への道を進んでいるように感じられてならない。先に「〈逆説的な意味での「権威」の発生装置〉と呼びたい」と記したのは、このようなことを指していることである。

## 六 金子務の場合

金子務の場合、なぜ編集委員に加わっているのか、金子務の担当した項目を読んでみたが、私にはよく理解することができなかった。それは、「権威」化以前の問題である。

金子務には『アインシュタイン・ショック』（全2巻、河出書房新社、1981・7）という好著がある。それまで、宮沢賢治文学における「アインシュタイン」や「第四次元」の問題は、重要であると理解しつつもなかなか手のつけられない領域であった。そこに現れたのが金子務で、「アインシュタイン・ショック」ならぬ、「金子務・ショック」を受けた記憶がある。『アインシュタイン・ショック』第二部「日本の文化と思想への衝撃―アインシュタイン・エフェクト」の第六章・第五節「宮沢賢治の四次元幻想」で金子は、谷川徹三や入沢康夫、小野隆祥らの先行研究を吟味しつつ、独自の解釈も披瀝し、宮沢賢治のテクストに沿ったかなり緻密で総合的な考察を試みている。

そのような期待感で今回の『宮澤賢治イーハトヴ学事典』を読んでみると、三〇年前から一歩も前に進んでいないことが見えてしまい、残念である。事典であるから、当然紙幅の制限があり、書きたいことも書ききれなかった点は配慮しなければならないにしても、読者が望んでいるのは、『アインシュタイン・ショック』から現在まで三〇年間の金子務の研究成果ではな

いのか。編集が「序」に宣言した「つまり本書は、読者・研究者の未来のために企画された」という気概を、われわれはどこに見いだせばよいというのだろうか。

金子務の執筆した、項目「アインシュタイン」や「アインシュタイン・ブーム」は『アインシュタイン・シヨック』を超えた内容を含んではいなかった。おそらく、金子務はアインシュタインを宮澤賢治の文学の問題として発展させる意欲を持ち合わせていなかったのだろう。次に引用するのは「アインシュタイン・ブーム」の末尾部分だが、賢治の問題に触れたほとんど唯一の個所である。

筆者の調査では、いわゆるアインシュタイン本の出版ブームは、大正10年7月刊の『相対性理論講話』アインスタイン著（桑木成雄・池田芳郎訳）、岩波書店に始まって、12年2月刊の『アインスタイン教授講義録』石原純著・岡本一平絵、改造社までで25点を数え、賢治が読んだかもしれない1冊が11年5月刊の『通俗相対性原理講話』ボルトン著（寮佐吉訳）である。このほか当

時の新聞・雑誌がこぞって解説を載せていた。賢治はこれらの中から、豊かな四次元イメージをつかんだのである。

これではほとんど何もいっていないに等しいであろう。「賢治が読んだかもしれない1冊が大正11年5月刊の『通俗相対性原理講話』ボルトン著（寮佐吉訳）である」とするならば、その著作のどこがどのように賢治の思想やテクストに影響、または痕跡を残しているか記述するのが本来の役割ではないだろうか。編集委員ならば、その程度の自覚が必要と考える。

つまるところ、金子務の果たした仕事は、科学者関連の人名事典のようなものである。宮澤賢治にどのような関わっているのか一向見当のつかない、摩訶不思議な項目も散見する。例として「寺田寅彦」と「田中館愛橋」の項目を引用しておく。

寺田寅彦 てらだとうひん

1878—1935

寺田寅彦は、賢治の18歳先輩で、賢治の2年

後に死んだ。賢治が科学と文学と宗教に橋かけたように、寅彦は科学と文学と社会に活躍した。賢治との直接の交流はないが、日常物理現象を幅広く考究、ガラスの割れ目、金平糖の角などの考究で知られる「寺田物理学」や数多いエッセイは、

同時代の賢治の目にも止まっただけである。寅彦は東京市麴町区（現千代田区）に高知県土族寺田利正の長男として生まれ、やがて高知県立中学を経て旧制五高の熊本第五高等学校第二部に入り、そこで英語教師の漱石と数学・物理学の田丸卓郎（後に東大教授）という二人の師に出会う。寅彦は田丸によつて物理学（と音楽）への眼を開き、漱石を介して俳諧と文筆の妙を知る。1899年東京帝国大学理科大学入学後には、『ポトトギス』を主宰する正岡子規と交わる。卒業翌1904年東大講師、実験物理学を専攻。1909年同助教授、直ちに文部省3年留学でベルリン大やゲッチンゲン大でブランク等の講義を聴き、欧米を巡歴。1913年に結晶のX線解析の実験で世界の最先端に立つ。1916年東大教授、翌年先の研究で1917年帝国学士院

恩賜賞。あわせて理化学研究所、航空研究所、地震研究所にそれぞれ研究室を持ち、気象学・地震学を中心に音響学・磁気学・結晶回折学・地球物理学など幅広い分野で活躍をした。

論文も数多く、英文論文だけでも3000頁に及ぶ。ただし寅彦流の、日常茶飯事に問題を見抜くという手法は、当時の重化学工業化を急ぎ産業技術への傾斜が進む状況の中では、「掘建て小屋の物理学」と悪口をいわれた。『吾輩は猫である』の寒月君の「首縊りの力学」や、『三四郎』の野々宮さんの「光線の圧力」といった漱石の話の素材は、理科大学地下室の穴蔵での研究場面の活写も含めて、みな寅彦がかかわる。寅彦は研究に飽きると漱石宅を「襲撃」するくせがあつて、話の種をふり撒いた。死の1年前のローマ字の歌に、「好きなもの いちご コーヒー 花 美人 懐手して宇宙見物」とある。◎金子務【参考文献】宇田道隆『寺田寅彦』国土社、1977 太田文平『寺田寅彦』新潮社、1990

田中館愛橘 たなかだてあいきつ

1856—1952

田中館愛橘は、わが国近代物理学の草分け。岩手県福岡町の兵法師範の家に生まれる。1882年東大理学部物理学科卒、学生時代から日本各地の重力測定を手がけ、1883年同大助教、1887年、外人教授ノットと全国地磁気測定で、日本南半分と朝鮮南部を担当、1889年グラスゴー大学留学、ケルヴィン卿に師事し、後ベルリン大学を経て、1891年に帰国、教授に。この年の濃尾地震で根尾谷の大断層を発見、震災予防調査会の設置（1892年）のため菊池大麓と尽力し、同年、測地学委員として、木村栄のZ項発見という世界的偉業を支えた。1907年には東洋諸国を代表して万国度量衡会議常置委員に選ばれ、国際的場裡で活躍。また航空機研究にも務め、1918年東京帝国大学航空研究所の設立に成功する。1906年帝国学士院会員、1925年貴族院議員、1944年文化勲章受章。日本式ローマ字運動の推進者でもあった。◎金子務【関連項目】木村栄、水沢緯度観測所

金子務には、「第四次延長」や「幻想第四次」などの賢治語彙を、本格的に解説してほしかった。寺田寅彦や田中館愛橘は、人物事典を開けばすむことである。

六、鈴木貞美の場合

鈴木貞美は『宮澤賢治イーハトヴ学事典』で大車輪の活躍ぶりである。項目によっては私にとつてかなり勉強となる内容も多かった。ただ、次に掲げる「ヘツケル」の項目などは、「確信的な先行研究『無視』の場合」の好例であり、再版に際しては必要な先行研究の書き加えを要求したい。

ヘツケル

Haeckel, Ernst Heinrich 1834—1919

19世紀後半から20世紀前期に活躍したドイツの生物学者。「宇宙は閉鎖系システムをなす、調和的な有機体」であると考え、「物質およびエネルギー不滅の法則」を最高原理に置き、



ダーウインの生存闘争を主要因とする進化論とをあわせ、無機界と有機界とを貫く一元論の体系を構想、形態学、系統学、生理学、発生学など生物学の統合をくわだてた。『一般形態学』(1866)で基礎を築き、1880年にかけて、「生物と無機的環境および共に生活する他の生物との関係を研究する学問」として、宇宙を循環する生命エネルギーの経済学「オイコロギー」(oikologie)——ギリシア語の家計を意味するオイコス(oikos)と学問を意味するロゴス(logos)とを合成——を提唱。「人間と動物は同じ道徳と自然における位置をもつ」という原理も提出していた。

20世紀への転換期にはじまる日本の実験生物学も、その影響下であり、ドイツに留学した三好学も生物の形態美を強調したし、科目名に「生態学」を採用した(1895)。とりわけ「個体発生は系統発生を繰り返す」という発生説は、あまねく知られた(今日では、完全に繰り返すわけではなく、いくつものコースがあ

ることが明らかにされている)。

一般向きの『宇宙の謎』(1899・翻訳1906など)、『生命の不可思議』(1904・翻訳1914など)は、明治末から昭和戦前期にかけて広く読まれた。後者では「万物有生論」を唱え、無機界と有機界の結び目に、ケイ藻類中に彼が「発見」した無核生物「モネラ」を置く(のち、その「無核生物」の存在は否定された)。賢治は、そのドイツ語版を最後まで架蔵していた。

なお、ヘツケルの学説をナチスが利用したため、第2次大戦後には、評価が著しく下がり、日本では名前を出すことさえ避ける風潮があったが、彼の発生説は、エンゲルス『自然弁証法』(1873—86)にも引用され、無機界と有機界の連続説はタンパク質への着目を生んだ。また、その唯物論の方法は、レーニン『哲学ノート』にも応用されている。

日本に留学した魯迅が医学の道を離れて最初に書いた「人の歴史」(人間之歴史、1907)も『宇宙の謎』の抜粋に、丘浅次郎『進化論講話』(1904)などを加味したものだった。今日では、エコロジ

—(生態学)の創始者として見直されている。

賢治作品中には童話「ビデテリアン大祭」に、肉食主義の反対派として、アメリカの喜劇役者に似た人物がヘツケルに扮したかのようにして登場する。不様に描かれているが、ヘツケルその人が批判されているわけではない。そこでは、著名な動物学者という意味しかもっていない。

むしろ、詩「青森挽歌」中の挿入節(詩人の内心の声と考えられる)に「ヘツケル博士!／わたくしがそのありがたい証明の／任にあたってもよろしくございます」と名前が出てくるのが問題になる。これを、死後の靈魂の棲む「つぎのせかい」との「通信」を否定しない賢治が、死者の靈魂の存在を否定する唯物論者、ヘツケルの説に一旦、従おうとしたとか、逆に皮肉ったものとする議論が行われてきた。どちらも文脈からいって無理だろう。その場で、「わたくし」が耳元で叫んだ言葉に、とし子がうなずいたのは、息を引き取ったのちに微妙に残る感覚や意識ゆえ、と詩人は考えている。これは、ヘツケル『生命の不

可思議』が「万物が生命をもっている」ことの根拠として、鉱物の結晶が生じるのは原子や分子にも一種の「感覚」があり、それゆえ整列できるためと説いていることに通じる。

そして、そのとき、「わたくし」が死んだと子どもの耳もとに叫んだのは「そらや愛やりんごや風すべての勢力のたのしい根源／万象同帰のそのいみじい生物の名」である。鈴木貞美は、早くから宮澤賢治の世界とヘツケルの機械論的万物有生論とに親近性があると認め、「宮澤賢治の生命観」(2003)では、詩人が「証明の任」にあたるべき課題とは、無機世界と有機世界の連続性ではないか、また「万象同帰のそのいみじい生物の名」とは「モネラ」ではないかと問いを投げた。課題の方はよいが「モネラ」には無理がある。「勢力」は、草稿では「エネルギー」とルビが付されており、「生命エネルギー」か、その化身を「生物」と考えている。のちの詩には「青ぞらのはてのはて」に「永久で透明な生物の群が棲む」とある。そんな生物であったとしても死にゆくとし子に対し

てひどいことを言ったことになる。このとき賢治は、仏教が説く死後の観念にそつてとし子の魂の行方を想像したものの、神に召されて永遠の生命の川に戻るといふ、とし子が抱いていたはずのキリスト教の死の観念を想い浮かべようともしなかつたのだから。◎鈴木貞美【関連項目】生命観／生命感、進化論、蔵書目録「賢治の」【参考文献】正木晃『密教と環境問題』智山文庫、真言宗智山派宗務庁、1994鈴木貞美「宮澤賢治の生命観——大正生命主義における位置」『国文学解釈と鑑賞』2003年9月号。

私のもとに『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の出版元である弘文堂から、三名の編集委員の連名による項目執筆の依頼書が送られてきた。私の担当項目は童話集『注文の多い料理店』関係と地質調査関係であった。送られてきた封筒には、見本刷りとして鈴木貞美の手になる「ヘッケル」の項目が同封されていた。「ヘッケル」に関しては私自身論文を書いていたので、気になつて内容を読んでみたところ、私の論文どころか、

もつと重要なはずの小野隆祥の先行研究までもが「無視」されており、【参考文献】には鈴木貞美の論文が記されているだけであつた。鈴木貞美の解説は、私の判断では、先行研究を超えるものでも、新しい視点から書かれたものでもなく、研究者としての基本的な約束事を守ることのできない「確信的な先行研究『無視』の場合」に当たると思われた。

そこで私は、面識のある編集者の一人である天沢退二郎に書簡を送り、拙稿を二部同封し、もう少し先行研究に配慮してほしい旨を述べた。その返事次第では、項目執筆を断ることも考えていたからである。天沢退二郎からの直接の返事はなく、その代わり、弘文堂の編集者より電話で、「天沢氏から状況は伺つている。鈴木貞美氏には直接論文を渡すことになつている」といった返事をいただいた。そこで私は、何らかの変化が期待できると判断し、了解したと答え、依頼項目も引き受けることにした。

ところが、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』が刊行される、「ヘッケル」の項目を確認してみると、上記引用のように、先行研究に対する目配せに関しては、基本

的には何ら変化がなく、かえって、

死後の靈魂の棲む「つぎのせかい」との「通信」を否定しない賢治が、死者の靈魂の存在を否定する唯物論者、ヘツケルの説に一旦、従おうとしたとか、逆に皮肉ったものとする議論が行われてきた。どちらも文脈からいって無理だろう。

と、先行研究の積み重ねを全否定した上で、自説としてヘツケルの「機械論的万物有生論」を持ち出している。

鈴木貞美は、早くから宮澤賢治の世界とヘツケルの機械論的万物有生論とに親近性があると認め、「宮澤賢治の生命観」（2003）では、詩人が「証明の任」にあたるべき課題とは、無機世界と有機世界の連続性ではないか、また「万象同帰のそのいみじい生物の名」とは「モネラ」ではないかと問いを投げた。課題の方はよいが「モネラ」には無理がある。

このように、鈴木貞美は自身の論の宣伝に努めているが、「ヘツケルの機械論的万物有生論」に関しては、三五年前、小野隆祥によりすでに指摘されていることである。また、私も一〇年以上前、小野隆祥の説を受け「万物有生論」に言及した拙稿を世に問うている。

先行研究としての自説の「無視」を書き手に訴えるのであれば、直接本人に手紙を送り、真意を確かめるのが筋とすべきかもしれない。しかし、今回の場合は、前もって拙稿を鈴木貞美に渡してあるにもかかわらず、聞き入れてもらえなかったこと、さらには、「序」において「先行研究の〈無視〉」もあり得ることが編集方針として宣言されていること、それらを総合的に判断し、私の疑義は、鈴木貞美個人への疑義というよりも、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』の編集方針そのものへの疑義であると考えようになつた。

それゆえ、ここで私は天沢退二郎に送った書簡を公開したいと思う。ただし、要点のみとし、敬体で書かれていた文体を、常体に直した。

●項目の見本にあった「ヘッケル」（鈴木貞美担当）の内容のうち、特にマークをつけた箇所「鈴木貞美『宮沢賢治の生命観』（2003）宮沢賢治の世界とヘッケルの機械的万物有生論との親近性があると認め」に関し、そのような指摘は、すでに同封の拙著「詩「青森挽歌」試論——「ヘッケル博士！」の解釈をめざして」（高知大学人文学部紀要「人文科学研究」第7号、2000年）で、詳しく引用・論じていること。また、この論文は、拙著単行本『宮沢賢治という現象——読みと受容への試論——』（蒼丘書林、2005・5）にも収録し、初出も明記してあること。

●「見本」や「宮沢賢治の生命観」（国文学・解釈と鑑賞、至文堂、2003・9）を読んだかぎりでは、ヘッケルの思想の賢治への影響の分析に関し、拙稿の内容を超えていないこと。殊に、鈴木貞美は、論中「モネラ」を結論的に持ち出しているが、それならば、先行研究者としての小野隆祥や大塚常樹の仕事を見無視することは許されないこと。

●先行研究をどのように扱うかは事典の場合難しいところではあるが、今回のケースは、ヘッケルの「万物有生論」が（自己の発見）のごとく書かれており、次数制限のある「項目」といえ、許されることではないこと。

これは、天沢退二郎へ宛てた書簡であり、鈴木貞美が直接知るところではないが、もし、私の主張に理があるとすると、天沢退二郎は編集委員と一人として、この問題にもう少し責任を持って関わってほしかったと考えている。拙稿を鈴木貞美に渡し、それをどう判断するかは鈴木貞美の裁量というのが、おそらくこの編集委員会の方針なのだろう。ならば私は、鈴木貞美の「ヘッケル」の項目を一本の公開された論文と判断し、以下、その矛盾点を証明していきたいと考える。

鈴木貞美の論の難点の一つは、ヘッケルの「万物有生論」の賢治テクストへの応用の仕方にある。

その場で、「わたくし」が耳元で叫んだ言葉に、とし子がうなずいたのは、息を引き取ったのちに

も微かに残る感覚や意識ゆえ、と詩人は考えている。これは、ヘッケル『生命の不可思議』が「万物が生命をもっている」ことの根拠として、鉱物の結晶が生じるのは原子や分子にも一種の「感覚」があり、それゆえ整理列でできるためと説いていることに通じる。

息を引き取った妹とし子の耳元に賢治が叫んだのは、その根底にヘッケルの「万物有生論」への信頼が賢治にあったからだというのが、鈴木貞美の主張だろう。

私は、鈴木貞美同様、賢治はヘッケルの「万物有生論」を知っていたと考えているが、「万物有生論」を前提に、死んでしまった妹に兄の言葉を通じたと考ええることには無理があると主張しておきたい。「万物有生論」をそのまま信じるなら、お題目で声をかける必然が説明できない。霊媒師のように普通の言葉で叫んでも賢治の言葉は妹に通じるはずではないだろうか。

しかし、賢治は「遠いところから声をとつてきて／そらや愛やりんごや風 すべての勢力のたのしい根源／万象同帰のそのいみじい生物の名」を「ちからいつ

ぱいちからいつぱい叫んだ」のである。つまり、賢治は「南無妙法蓮華経」と叫んだのであり、それゆえ「あいつは二へんうなづくやうに息をした」のである。死んでしまった妹が、本当に「うなづくやうに息をした」かどうかは、兄賢治の主観の問題である。賢治としては「南無妙法蓮華経」と叫ぶことが決定的に重要なのであり、例えば「とし子、おれの声が聞こえるか。」といった「南無妙法蓮華経」以外の言葉かけなら、賢治は妹が「うなづくやうに息をした」と考えるはずがないのである。当時の科学的常識からいって、すでにヘッケルの「万物有生論」は通用しないのである。もし妹に兄の声を通じたとするなら、それはホラーの場面になってしまうだろう。賢治が実在として信じていたのは〈業〉と〈妙法蓮華経〉である。鉱物もまたそれなりに意識を持つという「万物有生論」は、たしかに賢治の資質に近いところにある考え方なので、賢治の詩や童話との関係性を断ち切るつもりはないが、賢治は想像力とともに「万物有生論」的考え方を作品で生かしていった、と私は考えている。

鈴木貞美がなぜ、妹とし子の臨終場面にヘッケルの

「万物有生論」が応用できると考えたのかを検討してみたい。おそらくそれは、鈴木貞美は「万象同帰のそのいみじい生物の名」を、ヘッケルの想定した「モネラ」だと推定していたからである。「モネラ」は無機物と有機物の中間体であり、生物の根源（原初的形態）であることから、「万象同帰のそのいみじい生物の名」と勘違いし、「モネラ」から「万物有生論」へ連想の糸が繋がっていったのではないだろうか。刊行本では「『万象同帰のそのいみじい生物の名』とは『モネラ』ではないかと問いを投げた。課題の方はよいが『モネラ』には無理がある」と、「モネラ」説を撤回した記しているが、私を受け取った見本版には、「モネラ」説はまだ生きていたのである。どのような思考経路を通じ、鈴木貞美は「モネラ」説を撤回することができたのか、興味深いことである。また、そもそも、鈴木貞美はどこで「モネラ」という語を知ったのか。鈴木貞美もまた多くの先行研究を読んでいたから、ということなのではないだろうか。鈴木貞美の解説によれば「『生命の不可思議』（1904・翻訳1914など）は、明治末から昭和戦前期にかけて広く読まれた」ということで

ある。鈴木貞美の青春時代の必読書の一つに『生命の不可思議』が入っていたとは考えられないだろう。

「ヘッケル」や「モネラ」の問題は、小野隆祥の研究を抜きに語ることはできない。以下、かなり長くなるが小野隆祥の研究を紹介したい。一九七六年、今から三五年前に、小野隆祥は賢治の思想のかなりの深部にまで検討を進めていたのである。

『宮澤賢治イーハトヴ字事典』が「読者・研究者の未来のために企画された」ものなら、まずは、謙虚に過去に学ぶ姿勢をもつべきだろう。

小野隆祥の「『青森挽歌』とヘッケル博士」は、一九七六年に「啄木と賢治」（新春号、みちのく芸術社）という雑誌に発表された。少数数でしかも盛岡からの発行ということもあり、誰でもが目にできるといふ雑誌ではなかったが、執筆陣を確認するなら、続橋達雄、小沢俊郎、萬田務、斎藤文一ら、錚々たる面々であった。その後、群像日本の作家12『宮沢賢治』（小学館、平2・10）に再録され、誰しもが読める文献としての条件が整っている。

しかし当時も現在も、私を含め小野論文の価値を十分に理解できない研究者が多く、今後も継続的に研究されなければならない重要文献と考える。そこで、小野論文の重要と思われる箇所を抜粋し、小野論文の真の姿を知っていただく機会としたい。私は、小野論文をすべて正しいと考えているわけではない。ただ、小野論文を先行研究としてきちんと検証したうえでなければ、賢治研究は前に進むことができないということを主張したのである。

大正十一年十一月廿七日妹トシ子の逝去と「永訣の朝」「松の針」「無声働異」三篇の挽歌絶唱の後、半年余の間ほとんど詩作が絶え、翌年八月亡妹追憶の旅の中から「青森挽歌」（八月一日）「オホーツク挽歌」（同四日）「噴火湾（ノクタイン）」（同十一日）など五篇が生れた。一略しかしその九カ月間、賢治が精神的無為に等しい状態で追憶にのみ明け暮れたと考えてはならないであろう。全き宗教生活へ赴くことは阻まれても許されるのは宗教的な研究である。大乘仏教の

高遠な解脱論は傷心の賢治の救いとならなかった。彼の傷心は妹の死後の過程を突き詰めなければ癒されない性質のものであった。賢治自身の解脱の問題でなかったから、大乘経典は法華経を含めて失格であり、アビダルマ仏教・小乗仏教的理論のみが問題解明の光を与えたといえる。

小野隆祥の慧眼は、妹とし子の死後の過程（転生問題）を考えるうえで、「アビダルマ仏教・小乗仏教的理論」に光を当てた点にある。俱舍論への接近は賢治にとつての必然であったことを示したのである。

トシ子の死の半年前、十一年四月に木村泰賢の「原始仏教思想論」が刊行されていた。この本は仏教的輪廻は死後の靈魂が空間をかけ廻って種々の身分を取得するのではなく、われわれの生身が業に従って「馬たり牛たり地獄たり天堂たり」と変ずることであり、その輪廻する生命は第四次元の範囲に属すると説くものであった。この本の影響は一方では大正十三年一月の「春と修羅」序



詩の「第四次延長」という観念を生み出す素地となったが、他方では俱舎論の研究に赴かせ、木村の解説の原像として思い当る軽量部の因縁論を発見させた。その因縁論を基盤にして長詩「青森挽歌」が展開されたのである。

「小岩井農場」以来輪廻転生は賢治の切実な問題であった。しかしかに切実であるといつても、自己の死と死後の生とは、人間にとつて対岸の火災にも類した抽象問題として提示されるほかないが、最愛の肉身の死ははるかに具体的に痛苦に満ちた事実として現象する。賢治は、「宗谷挽歌」から窺えるようにある時はモリス・メーテルリンクの神秘主義に解答を求めもした。戯曲「タンタチールの死」における死の女王の手から弟を守りえない姉の立場は死の不合理性を教えるだけであった。それは生と死との断絶を説くものとして賢治とは唯物論以上に敵対的關係に立つのである。他方軽量部の説に従うとしても、前提となるのは自然科学との和解であろう。そこで賢治は改めて「エネルギーク」（エネルギー論・勢

力学）を読み直すのである。エネルギークの名称と概念との創始者をカツシレルはスコットランドの熱力学者ランキンとしているが、私は賢治の農民垂術概論の講義に名が出たビュヒネルからヘッケル、オストワルドと続く系列をこの名で呼ぶこととする。それは通常一元論と呼ばれる系列である。賢治は輪廻が生身のそれであるならばエネルギーの相続変換であるほかないと考えたと想われる。

小野論文によれば、賢治は木村泰賢の「原始仏教思想論」をバネに、小乗仏教の有部派と自然科学としての「エネルギーク」（エネルギー論・勢力学）を取り込んだとし、「輪廻が生身のそれであるならばエネルギーの相続変換であるほかない」と賢治は考えたはずだ、という地点にわれわれを導いていく。

「青森挽歌」の主題は輪廻である。そのことは「小岩井農場」と変わらない。しかし特に問題なのは生死の転換に当って、古き五蘊が減んだ時、い

かにして次ぎの存在のための新しき五蘊が生まれるかの問題である。蘊とは積集し、和合したものを指し、四大・五大などの元素の集合であり、五蘊といえは肉体・感官作用・心自体のすべてを含む。外道哲学では勝論派が「細身」という半ば靈魂的中間状態を過渡期の説明とするが、仏教諸派では「中有」の名で中間存在を認める説一切有部・正量部・東山部などと中間状態を否定して無中有説を採る分別上座部や大衆部諸派とがあった。賢治はこの対立を知っていたであろうが、単に中間存在ということでは情緒的にも理論的にも満足できなかったであろう。彼はほぼ木村泰賢の解説に合致する経量部の因縁論を満足すべきものと考えた。これは業（カルマ）そのものの受くべき果報を「種子の相続・変転・差別」の三段をふむものと説明する。種子とは現世の業そのものである。

わたくしがその耳もとで  
遠いところから声をとってきて  
そらや愛やりんごや風 （五ノルギ）  
すべての勢力のた  
のしい根源

万象同帰のそのいみじい生物の名を  
ちからいっぱいちからいっぱい叫んだとき  
あいつは二へんうなづくやうに息をした  
白い尖ったあごや噂がゆすれて  
ちひさいときよくおどけたときしたやうな  
あんな偶然な顔つきにみえだ  
けれどもたしかにうなづいた

（ヘッケル博士！  
わたくしがそのありがたい証明の  
任にあたってよろしうございます）

このように「遠いところから声をとってきて」  
臨終の妹の耳もとで力一杯叫ぶという表現はま  
ことに事宜に通せず納得ゆかない一行とも見ら  
れる。しかしこれはミーマンサー派（声論派）の  
「声常住論」を念頭におき、題目の「南無妙法蓮

華経」の声音が常住すると信じての行動であると見れば永解する疑問である。

賢治にとって、題目の「南無妙法蓮華経」の声音が常住すると信じていたはずと、小野論文は述べている。死んだ妹の耳元で賢治がさかんに「南無妙法蓮華経」と叫んでいる姿を、われわれが理性的に理解しようとするならば、小野論文は十分に刺激的である。

ビュヒネルが死んだ一八九九年にエルンスト・ヘッケルの「世界の謎」が出てたちまち十萬部売れ、最終的には四十萬部も売れた。彼は動物学者であつて生命の自然発生を根本思想としたダーキンはドイツにおける進化論の普及者としての彼に感謝している。ヘッケルは深海の中の「ウルシュライム（原粘液または原膠水）から無構造のプロトプラズマ塊が発生すると考えた。これが賢治のコロイド観を自信づけた。以後の生命は機械論的に発展する。それは非有機的結晶の発生現象と同一心ことである。根源の実体が物質と精神との二つ

の属性を示すのであり、精神は有情のエネルギーの集中にすぎない。彼は明言しなかりだけれども、宇宙実体も精神もエネルギーである。全世界は現勢的エネルギーと潜勢的エネルギーとに分れ、互いに置換される。すべては置換の運動として認知される。すべての生命は物質の相関としての変化であり、力の交換から発現し、それを心理学的に抽象すると精神という概念になる。彼は動物系統樹の創始者で、最初の生物モネラ（単細胞）から廿六段階で人類に達するとした。賢治が「小岩井農場」で「漸移のなかのさまざまな過程」と呼ぶ時、ヘッケルのこの段階説が最も具体的なモデルとして想念されていたにがいない。ヘッケルはもちろん靈魂の不滅を否定した。

上記の箇所を読むならば、鈴木貞美の「ヘッケルの機械論的万物有生論」への言及が、小野論文の見落としが、確信的な先行研究の「無視」にすぎないことが明らかであろう。鈴木貞美はヘッケルの「モネラ」説を重視している点を考慮するなら、小野論文に気が

つかなかったということとはあり得ない仮定である。

ここで人の解釈の批評から離れて挽歌全篇の  
思索の展開がどんな筋立てかを見て行きたい。

あらたにどんなからだを得

どんな感官をかんじたらう

なんべんこれをかんがへたことか

むかしからの多数の夷験から

俱舎がさっきのやうに云ふのだ

二度とこれをくり返してはいけぬ

賢治の問題は西欧風の靈魂不滅ではない。され  
ばといって大乘風の輪廻なき再生(リーバース・  
ナット・トランスマイグレーション)でもない。  
「からだ」と「感官」とを得る「転生」である以  
上、部派仏教ないし小乗風のそれであり、したが  
ってエネルギーの変換であるほかない。「多数の  
実験」というのは「証明」という以上そういわざ  
るをえないためである。この俱舎の証明を承認す

ることで思索の決着がついたのであって、以下の  
約四十行は情緒の表白で、元気づけ・回想・自戒  
など筋立てからいえば枝葉の餘情的叙述である。  
俱舎の証明の最初の段階はトシ子が題目を「幻  
聴」したかどうかについてであり、挽歌の導入部  
でこの問題はすでに提示されていた。

それはもうわたしたちの空間を二度と見な  
かった

それからあとであいつはなにを感じたらう

それはまだおれたちの世界の幻視をみ

おれたちのせかいの幻聴をきいたらう

「幻視」や「幻聴」は、五蘊が、したがってト  
シ子の生命すなわち業が種子となって他生に「相  
続」された証明となるもので、転生への移行過程  
としてあくまで「実在的な意義」を持ち、賢治に  
はどうしても証明を待つ必死な問題であった。経  
量部の因縁論のこの「種子の相続」の段階を無事  
通過できるならば、その後のトシ子の転生過程は

もう保障がある。そこで賢治はその相続を何とか確信したいと悶える。

わたしたちが死んだといつて泣いたあと

とし子はまだまだこの世かいのからだを感

じ

ねつやいたみをはなれたほのかなねむりの

なかで

ここでみるやうなゆめをみてみたかもしれ

ない

そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が

つぎのせか

いへつづくため

明るいいい句ことばのするものだったことを

どんなにねがふかわからない

これは相続の段階で、「たしかにトシ子はあのあけがたはまだこの世かいのゆめのなかにあて」野はらをひとり歩いてきた。そこから経量部因縁論の「変転」の段階に移って行く。

それらひとのせかいのゆめはうすれ  
あかつきの薔薇いろをそらにかんじ  
あたらしくさはやかな感官をかんじ

とあるように過渡期の幻想や夢は終って新しい五蘊が生じた。そこでトシ子は息づき

大循環の風よりもさはやかにのぼって行っ

た

もちろん挽歌は天上から地上へと視点を移したり、仏教説話からの幻想的素材を点綴するからわかりやすくはない。ただ賢治の関心が、死が断絶でなくて相続である点に向っていることは、何人の眼にも明らかである。輪廻を賢治が受け入れうるのは、何よりもまず現世の種子の「相続」であるとの条件つきであった。この条件が重大なのは、あえていえば、賢治自身にとっても個体の消滅はたえがたいことであつたからである。である

から、「幻聴」であろうともどうあっても「きこえた」のでなければならなかった。それからならば「変転」もまた許される。むしろ新しい感官は「遠いほのかな記憶のなかの花のかおり」という現世の記憶の基盤としても、通信の可能性の保障としても必要となる。賢治がトシ子との通信の幻想を信じていた事実もこの確信に基礎があった。

実際は、賢治の情緒的反応が「相統」と「変転」との二つのカテゴリーでの証明だけで鎮静したのではなかった。天上の生を華麗な仏典的幻想で美化したり、地獄へ堕ちたのではないかとの恐怖を訴えたり、日光のもとで苹果の匂にも似たトシ子の屍臭を喚いだり、さまざまな枝葉を交えて詩は展開する。この天界か地獄かとの賢治の或いは経量部のいう「差別」の段階をどう思い定めるかの惑いであろう。理論上それは業のみが決定するものであってこの決定は賢治の力を超えている。

小野論文に私が敬意を払うのは、詩「青森挽歌」を単なる教義的理屈で読み解こうとせず、賢治の苦悩

に寄り添うように教義の理解を提示してくれているからである。論文全体とすれば、私は小野論文に賛成はしておらず、特に「(ヘッケル博士! / わたくしがそのありがたい証明の / 任にあたってもよろしうございませす)」の解釈は、全く異なったものになっている。

しかし現在もなお、小野論文のような切実な問題意識からの研究が少数である現実を踏まえるならば、今後の宮澤賢治研究の発展は、いたずらに未来を指向するよりも、過去をきつちりと見直した方がはるかに実りあるものになると思えて仕方ないのである。

ここで、一応、拙稿の紹介をしておきたい。拙稿が「無視」されて当然の論文であるかどうか、あらためて、鈴木貞美に確認してほしいものである。「詩」『青森挽歌』試論——『ヘッケル博士!』の解釈をめざして(高知大学人文学部紀要「人文学研究」第7号、平12)の第三章「ヘッケルとは」から、「万物有生論」に言及している箇所を引用する。

もう一点、ヘッケルを賢治の対立者と見る研究者の誤解を正しておきたいことがある。それは、

ヘッケルが唯物論者であるがゆえに、賢治と対立するという考え方である。山本太郎や恩田逸夫、龍佳花の論がそれに当たる。確かにヘッケルを唯物論者と見ること自体に間違いはないとしても、ヘッケルの唯物論は賢治と対立しない類の唯物論であったと判断できるのである。現在から見ればヘッケルの唯物論はおそらく唯物論とは認め難いもので、ヘッケル自身記しているが、当時であってもヘッケルの唯物論はすでに少数派であった。小野論でも言及されていることだが、ヘッケルの唯物論の特徴は、物質の根本的属性として「空間の充足」の他に「知覚」を認めたところにある。

**万物有生論** 一元論の一形式で、余が宇宙の真理の最も完全な発表であると認め、三十八年以來、上記の著作に於て掲げた所は、今日、概ね万物有生論 (Hylozoismus) と云はれるものである。此の概念にては、物質は二個の根本的属性即ち属性を有し、物質

としては空間を充足し、力若しくは精神として知覚を有すとするものである。

物質の属性として「知覚」を認めるヘッケルの「万物有生論」は、唯物論からの逸脱に他ならないだろう。だがおそらく、この非唯物論的「万物有生論」こそが、賢治を唯物論者ヘッケルに近づけさせた要因であった可能性がある。「万物有生論」をもう少し詳しく見てみたい。

余が著名な物理学者及び化学者と詳細な談話を試みた際、余は屢々是等の人々が斯かる原子の『心霊』に就いては何等知らうとは欲せぬことを知った。余の確信に拠ると、原子の心霊という仮定は、最も簡単な物理化学的作用をも解釈するに欠くべからざるものである。勿論、此の際、吾人は、人類或は高等動物の屢々意識と関連した発達高度な心霊の活動と混同してはならない。否、吾人は、後者の発達の長い梯子を下って、

遂に最も簡単な原生生物からモネラにまで至るべきものである。此の全部同質なブラスマ塊（例えばクロロマセン）の精神は、結晶の精神と異なる所が僅かであつて、吾人は、モネラの化学的合成に於て仮定せねばならぬやうに、又結晶の形成に於ても可動性の分子が一定の形体で法則に従つて配列されて居ることを説明するには、低級の感覺（意識にはあらず）を必然仮定せねばならない。

ヘッケルが自己の一元論を完成させるために最も腐心したのは、いかに精神の問題を一元的に記述するかであつた。ヘッケルにとつて、精神と物質（肉体）を区別する二元論はもとより認め難いものであつたし、また、科学の名のもとに精神の問題を棚上げする唯物論にも与することができなかつたのである。ヘッケルは進化論を精神の一元化にまで応用させ、無機物から有機物を貫く精神の進化論を構築しようとした。最下級の精神

を原子に、最上級の精神を人間に見出せるとし、さらに無機物と有機物を繋ぐ中間的存在として「モネラ」なる形態を設定したのである。先の引用で「結晶の形成に於ても可動性の分子が一定の形体で法則に従つて配列されて居ることを説明するには、低級の感覺（意識にはあらず）を必然仮定せねばならない。」と記されているのは、この点に関わっている。

ヘッケルの企てた、無機物から有機物を貫く精神の進化論が成り立つためには、その中間的存在である「モネラ」の実在が欠かせぬ前提となつていた。「モネラ」は賢治の「創作メモ29」に町の名前として用いられており、その時賢治の念頭にヘッケルの「モネラ」説があつたことは疑いがない。大塚常樹が「宮澤賢治とヘッケル」（『宮澤賢治の宇宙論』<sup>ユネスコ</sup>朝文社、1993・7）で詳しく考察したように、賢治は「アマーバー」を「モネラ」的存在と把握していたようである。

ヘッケルの立てた「モネラ」の定義は「器官を有しない有機体」であり、無核のアマーバーや原



生藻、細菌などが該当する。

### 七、編集者以外の執筆者の場合

私は、項目執筆者の一人である一戸良行と面識を持つていないが、一戸良行の担当した項目には納得のいかないことが多い。それは一戸良行への不満というのではなく、編集委員はなぜ、あのような項目を立てたのかという不満である。以下、例を挙げてみる。

#### 白井光太郎 しらいみつたろう

1863—1932

越前福井藩江戸屋敷で誕生、明治政府に替わり、福井・毛矢町に一時居住するも再び上京、1875年、東京英語学校入学。1886年、東京帝大理科大学植物学科卒業。卒論は「蘇類の研究」で蘇の科学的研究の最初。『植物学雑誌』創刊号に掲載されている。伊藤圭介著『本邦博物学起源沿革説』（1877）に次いで名著『日本博物学年表』（1891）を刊行

する。『最新植物病理学』（1903）・『染料植物及染色篇』（1918）を刊行。賢治没年には不朽の名著『樹木和名考』（1933）が刊行されるが不老長寿目的の烏頭の処方を誤まり急逝している。◎一戸良行

#### 須川長之助 すがわちようのすけ

1842—1925

盛岡の南、紫波町出身。長之助が開港した箱館に滞在時、1860年秋、ロシアの極東植物研究者・C. マキシモヴィツチ（1827—91）が来日し、箱館領事館に寄寓する。その構内に付設したギリシア正教会内で偶然に長之助と遭遇する。日本語を習得する目的で雇用され、駒ヶ岳登頂案内役として随行する。植物調査の手伝いからその膳菓作製指導を受ける。

横浜にも同道することとなり、さらに長崎にまで一緒に赴く。1863年マキシモヴィツチが長崎より離日するまで採集植物の整理を手伝う。長之助の名を付した学名種は多く、和名としてチョウノ

スケソウ(バラ科)が知られる。◎一戸良行

## オパールリン

1894—1980

1917年、モスクワ大学数物理学部植物学科を卒業、ロシア革命に化学工業労働者として参画。スイス・ジュネーブに亡命中のA・Zノヤツハに師事、植物の呼吸酵素の研究を行う。「生命の起源」に関して、E・H・ヘツケル著Die Perigenesis der Plastidule (微小生命粒子内における波動の発生(1866))に着目、有機化合物蛋白質の起源を論じ、ドイツ生化学会誌にバツハと共著、単独著など大正末期に4報が見える。コロイド粒子に対して「コアゼルヴェート」なる名称にまで発展させる。「実験室小景」において、「そらを行くのはオパールな雲」とあり、石川啄木の処女小説「雲は天才である」(1906)が連想される。◎一戸良行 【関連項目】ヘツケル

「白井光太郎」や「須川長之助」の項目が立てられ

る理由はどこにあるのだろうか。賢治とのつながりのない学者の解説は、人名辞典に任せたらどうかだろうか。「オパールリン」の項目も同様である。ここでは唯一賢治との関連が「『実験室小景』において、『そらを行くのはオパールな雲』とあり」と引用されている。しかし、引用の意図はどこにあるのか。執筆者は「オパールリン」と「オパール」に関連性を認めているのだろうか。文脈上はつきりとしなが、どちらにしろ、「オパールな雲」とは、「オパールのような雲」、または「(オパール色した)雲」のことであろう。オパールの英語読みはオパールで、オパールはopalを形容詞化した opalineではないか。あえて「オパールリン」と結びつける意味はないと考える。本書の「蛋白石(たんぱくせき)」の項目(執筆者・加藤碩一)でも、過不足のない確な解説の中に「オパール」が色調表現として用いられていることが記されている。

おわりに

学問とは何か、研究とは何かと考えた時、私は譲れない一線として〈検証可能であること〉を条件として提示したい。希望する誰でもが検証可能な書き方が守られないとき、天沢退二郎・金子務・鈴木貞美らのいう「権威化の否定」、「先行研究の無視」という「序」の宣言が、編集委員の意図を超え、〈権威の発生装置〉として起動し始めるのではないだろうか。また、再版の折りに【参考文献】の検討・是正を要求しておきたい。

(了)